第 1 回 婦人科腫瘍の未来を考える会 - Winter Gathering –

2024 年 1 月 27 日から 28 日に、岩手県安比高原において「第 1 回 婦人科腫瘍の未来を考える会 - Winter Gathering -」を開催した。婦人科腫瘍専門医を目指す若手医師のキャリアプランや働き方、婦人科腫瘍分野の未来を議論する場として設けられた。

背景

近年、働き方改革や女性医師の増加に伴い、勤務時間の制限やキャリアプランに関する問題が増加しており、婦人科腫瘍専門医を目指す若者が減少している。このため、将来に向けての学会の役割や方向性、継続性についての模索が必要とされている。

参加者

婦人科修練医や、卒業後 15 年以内の婦人科腫瘍専門医を中心に全国から 20 名（男性 68%、女性 38%）が参加した。参加者は大学病院、市中病院、クリニックから集まり、議論を通じて診療、研究、教育の発展に向けた意見交換を行った。参加者は「働き方改革」「婦人科腫瘍専門医の在り方」「国際化」「若手医師の思い」という 4 つのテーマに分かれて議論を行った。ワークショップ形式で議論を進める中、各グループはそれぞれのテーマに基づいた提案や改善策を共有した。

第 66 回日本婦人科腫瘍学会総会で発表した成果とともに、各グループの報告を行う。

1.働き方改革（第 1 班）発表者：廣瀬佑輔

第 1 班のテーマは、「オレたちの働き方改革～婦人科腫瘍専門医の真のタスク～」であった。婦人科腫瘍専門医が直面している多忙な業務を改善し、より専門業務に集中できる環境を作るため、タスクシフトやタスクシェアの導入が議論された。

現状、婦人科腫瘍専門医は腫瘍治療に加え、多岐にわたる業務を抱えており、その中には必ずしも専門医が行う必要のないタスクが含まれていることが明らかになった。例えば、診療や研究の他に教育や管理業務が含まれており、これらの業務をどう適切にシェアするかが大きな課題である。そこで、医師以外の医療スタッフとの連携を強化し、業務の最適化を図るためのシステムが提案された。(1) 業務分担を見直すためのマニュアルやデジタルツールの導入（2）学会がコンセンサスを得たタスク重要度のガイドラインの提案（3）タスクシフトやタスクシェアの具体的な仕組み作りである。

これらの改革により、婦人科腫瘍専門医は専門性をより発揮できるようになり、業務の見直しやデジタルツールの活用が改革の鍵となると提案された。

2.婦人科腫瘍専門医の在り方（第 2 班）発表者：友野勝幸

第 2 班のテーマは、「婦人科腫瘍専門医の在り方～みんなが憧れるサブスペであれ～」であった。専門医の多様化が進む中、婦人科腫瘍専門医を目指す若手医師の減少が懸念されてお

り、特に「ハードワーク」「儲からない」「手術の時間が長い」などのネガティブなイメージがその要因として浮上した。婦人科腫瘍専門医に関するアンケート調査によると、8 割以上の医師が「やりがい」を感じている一方で、待遇やワークライフバランスには多くの不満が存在していた。特に、婦人科腫瘍専門医の業務は広範囲にわたり、手術、教育、研究などに時間を割く必要があり、都市部と地方の専門医の分布にも偏りが見られた。婦人科腫瘍専門医のハードルは高いのか？については、ESGO（European Society of Gynecological Oncology）との比較で、実際には婦人科腫瘍専門医のハードルはそれほど高くないとの意見が出された。

課題解決のために提案されたのが「婦人科セミオープンシステム」であった。近隣のクリニックと連携し、例えば子宮体癌術後の低リスク患者のフォローアップをクリニックで行うことで、中核病院の外来負担を軽減するシステムである。また、育児や病気によるキャリアの中断があった場合でも、再開しやすい環境を整える必要性も強調された。

婦人科腫瘍専門医の魅力を高めるためには、若手医師にとってのマイナスイメージを払拭し、やりがいと待遇のバランスを改善することが急務であると考えられた。

3.国際化（第 3 班）発表者：浅野史男

第 3 班のテーマは、国際化に向けた取り組みであった。参加者は、国際学会への参加や海外留学の推進など、国際競争力を高めるための具体策について話し合った。

(1)国際化の意識調査

若手医師とベテラン医師の間で「国際化」に対する意識の差を明確にするため、アンケートが実施された。その結果、両世代とも国際化の必要性を感じており、特に若手は海外留学に強い関心を示していることが分かった。

(2)国際化の障壁とその解決策

費用面やモチベーションの維持、家庭環境といった障壁が挙げられ、学会による経済的支援やホームページでの情報提供、国際学会への参加促進が提案された。

婦人科腫瘍専門医の国際化を推進するために、ホームページでの情報提供強化や学会支援の拡充が重要であると結論付けられた。

4. 若手医師の思い（第 4 班）発表者：道佛美帆子

第 4 班は、「若手医師がとりたくなる婦人科腫瘍専門医の在り方～ここがヘンだよ！婦人科腫瘍医～」という視点から議論を進めた。

(1)婦人科腫瘍専門医の教育と多様性

婦人科腫瘍専門医の多様なキャリアパスを実現するため、手術に特化せず化学療法に重きを置く資格の新設が提案された。

(2)若手医師のイメージ調査

若手医師が婦人科腫瘍専門医を選ばなかった理由として「手術が長い」「拘束時間が長

い」「ロールモデルがいない」といった意見が挙げられた。
(3)婦人科腫瘍専門医の魅力を高めるための提案
インセンティブの向上やワークライフバランスの改善が婦人科腫瘍専門医の魅力を高めるために必要であると結論付けられた。また、広報活動の強化や座談会の開催が若手医師の関心を引きつけるための重要な手段として提案された。

イベント内容

講演会のほか、参加者間の交流を深めるためのスキーや温泉などのアクティビティも開催された。また、イベント終了後のアンケートでは、参加者の満足度が高く、今後もこのような会を続けてほしいという要望が多く寄せられた。

総括

今回の Winter Gathering では、婦人科腫瘍専門医としてのキャリア形成や業務効率化、国際化に向けた取り組みが議論され、各分野での改善策が提案された。参加者の多くが満足し、今後の継続的な開催を望む声が寄せられた。各テーマにおいて具体的な課題が明らかにされ、将来の婦人科腫瘍専門医の働き方改革やキャリア形成の一助となる有意義な会となった。

日本婦人科腫瘍学会 若手 WG
委員長 馬場長
主幹事 野上侑哉
委員 小松宏彰 関根花栄 永沢崇幸 山田有紀 中川慧 松宮寛子

第 1 班
廣瀬佑輔 （昭和大学）
井平圭 （北海道大学）
古株哲也 （京都府立医科大学）
小林光紗 （聖隷浜松病院）
藤本悦子 （四国がんセンター）

第 2 班
牛若昂志 （高知大学）
大澤有姫 （大館市立総合病院）
杉森弥生 （文京ガーデン女性クリニック）
玉手雅人 （札幌医科大学）
友野勝幸 （広島大学）

第 3 班

浅野史男　（杏林大学）
松宮寛子　（北海道大学）
羽生裕二　（千葉大学）
本原剛志　（熊本大学）
清野学　（山形大学）

第 4 班

田崎和人　（久留米大学）
道佛美帆子（横浜市立大学）
中川慧　（大阪大学）
松浦拓人　（東京西徳洲会病院）
三浦理絵　（青森県立中央病院）